

Dynamic defecography にもとづいた排便障害の手術術式の選択

鳥越義房 高月 誠 窪田 覚 後藤友彦 寺本龍生

東邦大学第1外科

我々は、排便障害に対する手術術式を dynamic defecography の所見から選択している。Dynamic defecography をビデオに録画し、rest, squeeze, strain の3タイミングでスポット撮影を行い、パーソナルコンピュータにデジタル画像として取込んだ。解剖学的指標として rectocele の最大長 (RC)、直腸肛門角、骨盤底下垂度、会陰下垂度、恥骨直腸長、肛門管長を計測した。これらは術前と術後にそれぞれ測定し、比較評価した。

対象は rectocele 32例、直腸脱 9例、肛門機能不全 2例、会陰裂傷 4例で、rectocele 症例では6例に経肛門的縫縮術、26例に経腔的腔後壁形成術を行った。

直腸脱症例では Gant-三輪 + postanal repair, 肛門

機能不全症例では postanal repair 単独と postanal repair + Kottmeier 法を行った。会陰裂傷症例では会陰形成術を行った。Rectocele 症例では腔への突出部が消失し ARA は開大、過剰ないきみ、尿失禁は改善した。直腸脱症例、肛門機能不全症例では ARA は強調され、会陰裂傷例では ARA が開大し便失禁の症状は消失した。Rectocele 症例では術前と術後の RC 最大長は縮少し有意に改善した。肛門機能不全症例の会陰下垂度も改善していた。

Dynamic defecography は骨盤底筋群の動的所見を得ることができ、排便障害の診断と手術術式の選択のためには重要な検査法である。